「山の神」について
ー調査を終えてー

名張市には里山を中心に山の神を崇める民俗信仰がある。小場（隣組）単位に祠や、碑があり、お祭りをしている。1月7日、ウツギの木の枝を、しめ縄や神木に引っ掛けて「西の国の糸綿、東の国の銭金、うちの蔵にどっさりこ」と唄いながら山の神を引き寄せる「鍵引き行事」をする。神道によると、山の神は大山祇神（オオヤマツミノカミ）、木花佐久夜姫（コノハナサクヤヒメ）で、大山祇神社は愛媛県大三島町にある。しかし、多くの人は大山祇神という認識はなく、自分たちの一番近くにいる神として崇めている。1月7日には、山の神を里に引き寄せる鍵引きを、１０月７日か１１月７日には、山の神の祭りを開いている。

鍵引き行事は、最近では宵鍵と称して、前日の６日午後６時頃から始めるとこと、伝承をきっちり守って、日付けが変わる午前零時を期して山に出かけ、一番鍵を競うところもある。現在でも家族の男性が打ち揃って行くところがあり、赤ん坊もお父さんに背負われて鍵引きをする。男性の数だけ束ねたウツギの枝をしめ縄に引っ掛けて、鍵引き歌を唄いながら３回引く。このあとワラを燃やし、その火でモチを焼き、七草粥に入れる。

鍵引きにはウツギの木が多く使われている。ユキノシタ科の落葉樹で、山や川原に自生している。ウノハナともいい、初夏に白い五弁の花をつける。１年間に２、３ｍも枝が伸び、前年の枝を少し残してカギ状にする。引っかけるのに都合がよい。家族の男性の数と神さんの分を用意するところが多く、カシ、クリの木の枝を使うところもある。また、ワラで小さな俵を作り、３、４ｃｍの小石を入れて福俵にする。俵状の先を三つ編みして結ぶところもあるが、両端を袋にして石を入れるところもあり、その形から「キンダマにして」と説明するお年寄りが多い。

葛尾では鍵引きの他、クラタテをする。山の神碑の前に半紙を四角く切って敷き、四隅に２０ｃｍ程で、御幣をつけたカヤの棒を立て、真ん中にもコウジミカンを刺したカヤの棒を立てる。半紙の上にはタツクリ、干し柿、鏡餅など置く。クラタテは神の座で、山の神が降臨する場所ともいわれ、蔵が建つほどの豊作の祈りも込められているという。

名張は、市の面積の５５％を山林が占め、市内のどこからでも山を望むことができる。奥山では、ヒノキ、スギを育てる林業が、集落近くの里山では燃料としての薪や柴取り、炭焼き等をするため、村人は山に入った。長く名張の地を治めた藤堂藩もヒノキ、スギ、マツ、モミ、トガの５種類を除いて伐採を許した。人々は山を利用することにより、山と一体となった山の神信仰を深めていったものとみられる。

今回の調査は、県の補助事業として平成１４年１月から３月にかけ、３人の調査員が里山を駆け巡った。鍵引き行事が続けられている里山を踏査、碑の所在を確認するとともに行事の内容を聞き取りした。鍵引きは途絶えているものの「確か、あそこにもあったぞ」という古老の話を頼りに山に分け行った。集落の人たちは、案内を気軽にかってでてくれた。調査の結果、山の神碑は市内７８カ所にあり、６５カ所は伝承を守って鍵引き行事を続けている。また、「山神」の碑は１４０基にのぼり、祠の中にご神体を祭るところが３カ所、カシの木を御神木とするところが１カ所、自然石を山の神とするところが２カ所あった。

山の神信仰は、いつ起こったかは定かではないが、五基の碑に年号が刻んであった。一番古いもは享保１５年（１７３０、上長瀬・国津神社）とあり、今から約２７０年逆上る。この他、宝暦３年（１７５３、下長瀬の神矢組）、寛政９年（１７９７、上長瀬・国津神社）、文化１２年（１８１５、奈垣・板屋）というものもあった。また、神屋の関野地では山の神講の記録が惜しくも当屋の火災で消失したが、「昭和６０年度は記憶をたどって、３６１回とする」とした。逆算すると寛永年間（寛永元年が１６２４）が講の起源となる。山の神の信仰は、相当古くからあったものとみられる。

地域的には山間地域の長瀬、神屋、布生などの国津地区、室生村と尾根を境にした茶臼山に抱かれるように集落が広がる安部田地区、平家の落人伝承の残る滝之原地区、それに夏見地区に多い。なかでも下長瀬は、神社に合祀しなかったため、小場ごとに山の神碑があり、１３カ所（碑は１４基、石３）の内、１２カ所で鍵引き行事が行われており、１月７日は山のあちこちから、ワラを燃やす煙が立ちのぼる。

山の神の行事は、名張を取り巻く周辺でも行われ、奈良県の山添村では鍵引きの他、クラタテをしている。葛尾のクラタテは山添村の影響を受けたものとみられる。鶯山では西の倉、東の倉と二つたてる。名張市の長瀬と山を隔てて隣接する青山町高尾でも鍵引きをしている。県道青山美杉線の原池バス停上の原池下小場では、山中に６戸がお祭りする山の神碑があり、ヒノキの大木に渡したしめ縄に５束のウツギの枝が引っ掛けてあった。この辺りでは家族の男性２本づつと神さん２本を束ねる。小判型のモチ７つを供える。やり方も長瀬と同じ。大山田、島ヶ原、美杉村でも鍵引き行事が行われている。室生、曽爾、御杖村は山の神の祭りはしているが、鍵引きはしていない。青蓮寺川上流で、林業が盛んな曽爾村伊賀見では神社や小場に山の神碑があり、林道を３キロも入った倶留尊山中腹にも山の神碑がある。伊賀見ではウツギの枝を山の神を川から引き揚げるために使う。山の神は、女性で神無月（１０月）に夫が出雲へ行った留守に浮気し、帰って来た夫に川へ放り込まれてしまった。霜月（１１月）から川

に浸かっているため、正月７日に引き揚げるのだという。前を流れる青蓮寺川でウツギの枝を使って川石を７つ引っ掛けて拾う。ウツギの枝は１本で福俵には７つの石を入れる。碑は小場や神社にあり、モチ等を供えるが、鍵引きはしていない。月ヶ瀬村では、女性の人も鍵引きに行く。

神道では大山祇神、木花佐久夜姫が山の神とされているが、「山の神はどんな神さん、なぜ鍵引きを」と鍵引きをしている人にたずねると「神無月（１０月）に八百万（やおよろず）の神が出雲に行った留守に村人が供えたモチを出雲に行かなかった山の神が全部食べてしまった。出雲から帰って来た神々が怒って山の神を川に放り投げた。鍵引きは川から山の神を引き揚げるため」と話す人が多い。鍵引きの後でワラを燃やすのは水に濡れた山の神を温めるためだという。

調査で訪ねた家の古老が、「山の神ならウチにひとり居るで」と言われたことがある。妻のことである。年配の人は友人同士の会話のなかで妻のことを「ウチのヤマのカミ」と話すことがある。山の神は女性で、やきもちを焼くので鍵引き行事には男性しか参加できない。鍵引きの道具のウツギの枝や福俵は家族の男性の数だけ揃える。滝之原では山の神の祠にきまって男性のシンボルに似た石が置いてある。山の神さんを喜ばせるためだという。

「秋の収穫後、山へ戻った山の神を春、里に引き寄せて田の神になってもらうために引き寄せる。」と伝えているところもある。山間部では山仕事の守護神として信仰し、フシ（ウルシ科のヌルデ）の木の枝を削って「百姓道具一式奉納」「山仕事道具一式奉納」と書いて供えるところ（下長瀬）もある。

鍵引き歌は「西の国の銭金、東の国の糸綿、伊賀の国の米麦、うちの蔵に引き寄せよ」というのが一般的。これに「加賀の国の鍋釜」「佐渡の国の金銀」「明石の国の魚塩」などを置き換えたり、付け加えたりしている。また、「悪魔、鼻たれ、西の海へどんぶらこ」と締めくくるところもある。昔の人は好き勝手に歌の文句を継ぎ足したようだ。

山の神碑が、神社に多いのは明治４０年の合祀令で一村一社としてお宮さんを集めた際、小場や山の登り口にあった山の神碑も集められた。布生の国津神社には１０基もある。しかし、隣組の神さんとして守り続けているところも多く、小場に不幸ごとが続き「山の神さんのたたりや」と、いったんは合祀したものを元あった場所に戻したところもある。

山の神碑は、ほとんどが自然石に「山神」と彫ってある。楷書体でだれにでも読め、彫りが深く、数百年を経た現在でも残っている。丸い石に山神と彫っただけの素朴なものが大半だが、なかには大きな石を家型に成型、山神と彫った短冊型の石板を入れた立派なもの（下長瀬・神矢組）、石の上部を山形にして、表面を剣先型にくりぬき、「山神」と深く刻んだもの（下長瀬・木平組）等もある。神社以外で碑のある所は小場の裏山が多く、カシの大木や年輪を重ねたヒノキがそびえ、鎮守の森を形成している。昔から小場の人たちによって守られてきたことがよくわかり、それらしき雰囲気がただよう。また、山の神碑のあるところは開発されずに残っており、環境破壊の歯止めの役割を担っている。

山の神信仰が多くの小場で、平成の時代まで残ったのは「山神」の碑であることが要因だと考えられる。石に浮き彫りした地蔵や道祖神が風化して、はっきりと分からなくなってしまったのに対し、山の神碑は誰が見てもわかる楷書で彫られているからだ。碑がなく山に向かって鍵引きしていたところではいつの間にか、行事が途絶えてしまった。また、いったんは合祀されたものの合祀先が遠かったため、元の地域に戻した碑が、山林の売買によって行方知れずとなり、鍵引き行事が伝承されなかった例もみられる。

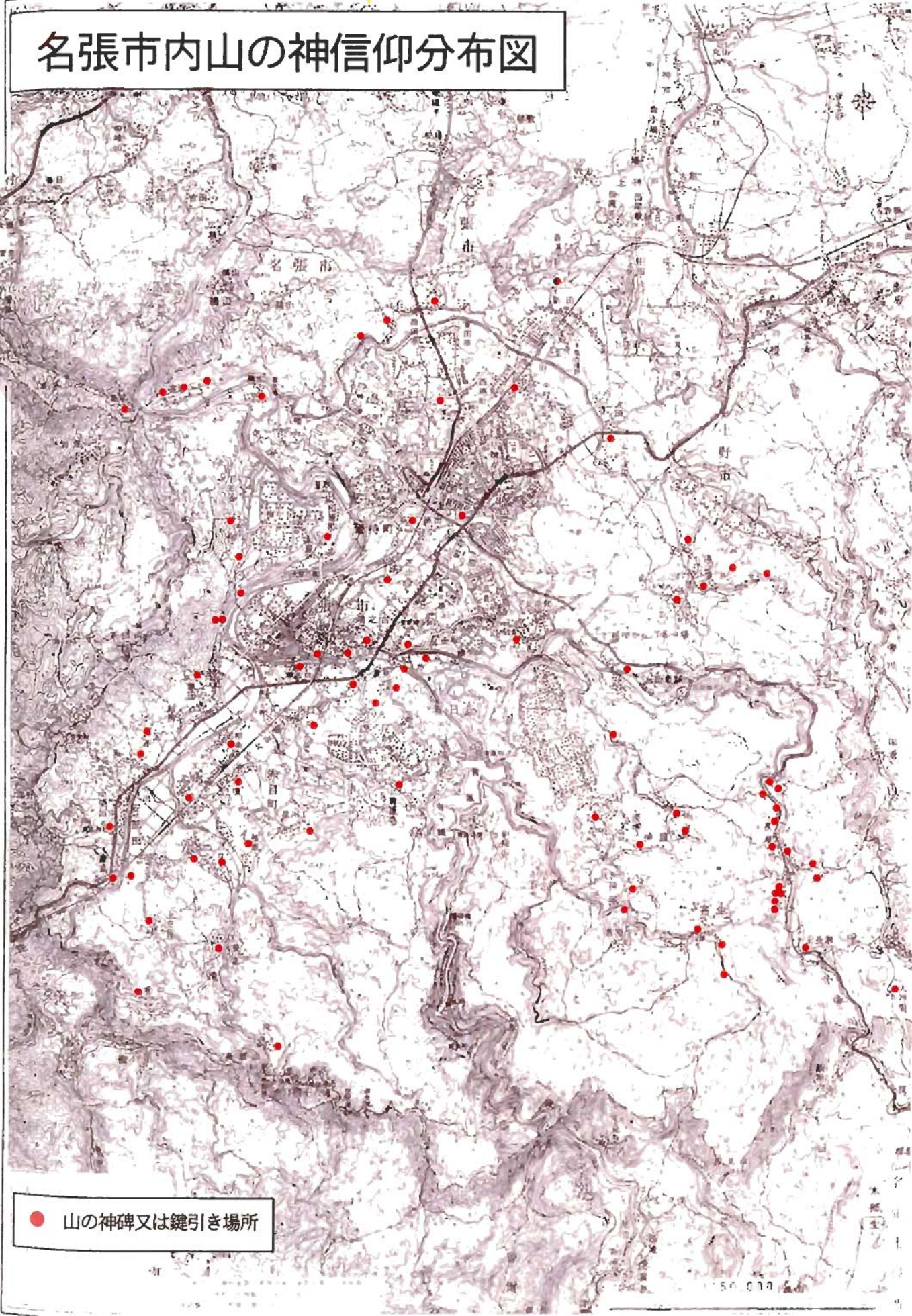
今後も急速な生活様式の変化により、山の神信仰が途絶えていくかもしれないが、我々は、先人たちが培ってきたこの伝統を、後世の人々へ伝える一資料として、ここに現状を記録にとどめておきたい。

なお、末筆ながら、今回の調査に際し、ご多忙の中、快く案内、ご教示くださった皆様に、この場をお借りしてお礼を申しあげます。

平成１４年３月

民俗儀礼調査員

名張市内山の神信仰分布図



∽　聞き取り調査票　∽

《名張地区》

山の神調査票１

日時＝平成１４年２月２６日（火）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝平尾

話者＝住矢市兵衛さん▽高内昭生さん（６４歳）

○山の神碑

平尾山の裾にある水資源開発公団の寮の裏に面積２００㎡ほどのカシの木の森があり、鎮守の森であることがわかる。周囲はうっそうとしており、山の神の雰囲気は十分。碑はカシの大木の根元に鎮座。高さ７０ｃｍ・幅５３ｃｍの見栄えがする石。碑は根元に組まれた石の基壇の上にあり、「山神」の書体もはっきりしている。

○鍵引き

福俵をつけた約２ｍ程の先端が鍵状になったウツギの枝（他地域のウツギの枝もほぼ同様の形状）が３束、カシの木の枝に引っ掛けてあり、平成１４年は３戸が鍵引きをした。１月７日朝、家族の男性の数のウツギの枝と福俵、それに神さんの分をもって出掛け、鍵引きをする。供えたモチを持ち帰り、七草粥に入れる。

○その他

神域は平尾の農家組合が管理しているが、近くに住む高内昭生さんが毎朝、お参りしている。高内さんは鍵引きとは無縁の人だが、数年前、散歩の途中、山の神碑を知った。以来、神域の雑草刈りや、落ち葉を掃き清める作業を続けている。

山の神調査票２

日時・平成１４年２月２６日（火）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝宇流富志祢神社

話者＝中森良孝さん（７５歳）

○山の神碑

宇流富志祢神社境内の北側に山の神の祠がある。飾り気のないお堂の中に高さ４０ｃｍ・幅３０ｃｍの丸い石が碑。山神と彫ってある。

○鍵引き

名張地区は山があるわけではないが、山の神の熱心な信者と、かつては頓子山で鍵引きをしていた南町や、朝日町の人たちが鍵引きにやって来る。宵鍵で１月６日の夜、数人が鍵引きにやって来る。しめ縄が祠の前に張られ、それにウツギの枝を引っ掛けて、山の神を引き寄せる。

○その他

山の神調査票３

日時・平成１４年２月２５日（月）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝大谷

話者＝三根つぐえさん（７３歳）

○山の神碑

大谷山の稲荷神社に向かう途中のヒノキ林のなかにある。ヒノキの大木が碑を囲うようにあり、高さ９７ｃｍ・幅６５ｃｍの巨大な碑がある。「山神」と刻んであり、周辺はきれいに清掃されて、お参りする人の気配が感じられる。ヒノキ林が直径３０ｃｍほどの若木に対して、碑の周囲の４本は大木で、山の神の神域という雰囲気。

○鍵引き

鍵引きは行われていない。南町の人たちは宇流富志祢神社へ鍵引きに行く。

○その他

南町の１７戸で山の神講を組織。毎年１１月の日曜日に山に入り、碑周辺の下草刈りなどの清掃をした後、集会所で懇親会を開く。

山の神調査票４

日時・平成１４年２月２５日（月）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝大谷の頓子山

話者＝

○山の神碑

朝日町の潜水橋を渡り、名張川左岸に出て、川沿いの道路を右折、１００ｍほど下ると、子安地蔵がある。山の神碑は地蔵の前にそびえるカシの木の根元にあり、高さ５５ｃｍ・幅３０ｃｍで「山神」と、刻んである。対岸の朝日町の人たちの山の神さん。

○鍵引き

碑の前にはサカキが供えてあり、お参りの気配はあるが、平成１４年は鍵引きがおこなわれた形跡はない。地元では鍵引きは宇流富志祢神社へ行くという。

○　その他

頓子山の子安地蔵は、天正の乱後、名張を最初に支配した松倉豊後守が子宝に恵まれず、頂上にあった石仏に祈ったところ、一子を得た。このことから石仏を子安地蔵とする信仰が始まり、子安さんとして親しまれている。

山の神調査票７３

日時・平成１４年２月７日（木）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝上長瀬の国津神社

話者＝福山悦雄さん（６４歳）、家岡繁さん（７０歳）

○山の神碑

上長瀬の国津神社には、４体の山の神が鎮座する。拝殿と観音堂の間にある高さ１m程の石組に４体が並ぶ。その傍らにクスの大木がそびる。高さ３０ｃｍ・幅２０ｃｍのものは、側面に享保１５年（１７３０）と読める彫り込みがある。また、モミジの大木に隠れるように鎮座する碑は、上部が三角形のようになった高さ５０ｃｍ・幅４０ｃｍ。「山神」ときれいな文字が彫られ、その右側の文字は、寛政９年（１７９７）とはっきり読み取れる。このほか、高さ３５ｃｍ・幅２６ｃｍ、高さが３５ｃｍ・幅１７ｃｍのものがある。いずれも「山神」と彫られてある。

同神社に４体もの山の神があるのは、東出など４字（アザ）にあったものが明治か大正時代に集められたらしい。上長瀬の国津神社は、布生の国津神社から昭和２７年に分社されたものだが、山の神碑が鎮座する石組は古く、かつて遥拝所があったところだという。このため、同所に集められたものらしい。

○鍵引き

同神社の氏子は３２戸。林業者が多く、昔は一番鍵を競ったものだという。平成１４年は１１戸が鍵引きした。「早く引いたものが得をする」とあって、時計が零時を回るのを待って参った。いまでも名残があり、日付けが変わるのを待って行く人が多い。ウツギは男性２本づつと神さん２本を束ね、川の石７個を包んだ福俵を付ける。お供えはモチ７個の他にミカン、タツクリ等を一升枡に入れて持って行く。モチは前年のウツギの枝をその場で燃やして焼き、持ち帰って七草粥に入れる。

○その他

山の神調査票７４

日時・平成１４年２月６日（水）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝上長瀬の大戸屋

話者＝福山玲子さん（７１歳）

○山の神碑

下長瀬の長瀬橋から５ｋｍ程山道を登った海抜５４０ｍの山中にある。国道３６８号沿いの長瀬小学校が海抜３２３ｍだから、２００ｍを一気に登ることになる。下長瀬集落の背後にそびえる山の中のスギ林を蛇行しながらはしる市道蔵持霧生線を１５分程はしると、３戸６人が暮らす大戸屋の集落にたどり着く。集落の上に道標があり、そこからさらに１００ｍ程登ると、大戸屋の人たちが崇める愛宕宮がある。

碑は、右隅にある。６０ｃｍ程の自然石で、文字は彫ってない。

○鍵引き

勤めの関係等から大戸屋を離れて桔梗が丘団地等に出ている人たちも、１月７日には帰ってきて鍵引きをする。ウツギは７本を束ね、福俵を１つ付ける。一升枡に７つモチを入れ、他に干し柿、タツクリなども供える。

鍵引き歌は「大和の国の絹綿、引き寄せよ、引き寄せよ、伊勢の国の銭金、引き寄せよ、引き寄せよ」。また、最初に参った人は「山の神を引き上げよ」と唄う。

○その他

その昔、伊勢神宮にお参りする人たちが通った伊勢本街道の名残があるが、これ程高いところをよく歩いたものだと、現代人には想像もつかない秘境。

山の神調査票７５

日時・平成１４年２月７日（木）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝長瀬上出の木平

話者＝木平巳夫さん（７２歳）

○山の神碑

名張川左岸、木平さんの持ち山の中にある。木平さんの庭から３０ｍ程登った砂防ダムの下。スギの大木の根元の岩に、木平さんら４戸が祭る山の神碑が鎮座する。高さ３５ｃｍ・幅２２ｃｍの大きさで「山神」と彫ってある。平成１４年は、２束のウツギの枝があった。

○鍵引き

７日朝、モチ７つの他、タツクリなど正月の肴を一升枡に入れて供える。鍵引きの後、どんどの火でモチをあぶり、持ち帰って七草粥に入れる。鍵引き歌は唄わない。

○その他

山の神調査票７６

日時・平成１４年２月５日（火）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝長瀬の横矢組

話者＝河島良吉さん（７０歳）

○山の神碑

長瀬入り口の集落裏手の丸山を２０ｍ程登った急斜面にある。その昔、伊勢参りの街道だった幅１ｍ程の道筋にあり、石組の上に置かれた高さ３５ｃｍ・幅２５ｃｍの丸い石が碑。「山神」と彫られてあり、カシの大木の根元にある。河島さんと隣接の３戸の山の神。

○鍵引き

鍵引きにはウツギの枝を七福神になぞらえて７本束ね、１年の無事を祈って１２個の石を入れた福俵をつける。カシとモミジの木に渡した４ｍのしめ縄にウツギの束を引っ掛けて鍵引きをする。その後、１本を持って帰る。また、長さ４０ｃｍ・太さ５ｃｍ程のフシの木を削った面に「奉納山の神様、五穀豊穣、家内安全、交通安全祈願、河島家」と書いて供える。引く際は「伊賀中の宝、この谷に引き寄せよ」と唱える。

○その他

河島さんらは、１４戸で山の神講を構成し、１２月に講を開く。最近は奥さん連中を伴って日帰りの小旅行をして親睦を深めている。

山の神調査票７７

日時・平成１４年２月５日（火）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝長瀬の横矢・湯目

話者＝新　一さん（８１歳）

○山の神碑

長瀬の横矢橋上流１００m程の左岸の川端にある。１m程の石の基壇の上に高さ４５cm・幅２５cmのものと、高さ３５cm・幅２３cmのもの、最近、一緒にされた高さ３０cm・幅２５cmのものの３体がある。いずれも「山神」と彫ってある。カシとサクラの木に渡したしめ縄にウツギの枝が７束引っ掛けてあった。また、フシの木の棒を面とりして「奉納　山林道具一式」と書いたものが供えられていた。国道３６８号沿いで、ウツギの枝は１年間そのままにしてあるのでいつでも見られる。３体の山の神さんは、横矢、湯目の１１戸がお祭りしている。

○縄引き

ウツギの枝は男性２本づつの家族分と神さんの分１本を束ねる。供え物は、モチをひと重ね、干し柿、餅、コメ等。縄引きは、１月７日の日の出前。「山の神を引き寄せよ」と唱えて引く。

○その他

新さんら１１戸は、隣接する河島さんたち３戸（調査票７６）と山の神講をつくっている。

山の神調査票７８

日時・平成１４年２月５日（火）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝長瀬の木平組

話者＝木平利三さん（７４歳）

○山の神碑

長瀬のかかりにある集落、木平組には３カ所に碑がある。

一つ目は、名張川の木平橋を右岸側に渡った集落の背後の山の中に木平さんたち５戸が祭る山の神碑がある。住宅のすぐ背後の山を５０m程入ったヒノキ林の岩場に高さ６５ｃｍ・幅３２ｃmの長方形の碑がある。山の形が深く彫り込まれてあり、「山神」と彫られてある。碑の前には長さ５０・太さ５ｃm程の地元でいうフシの木を面取りし「奉納　百姓道具一式　敬白」と墨で書いたものが３本供えられていた。

二つ目は、集落の最下流の子安観音横にある。石組みの基壇の上に高さ４０ｃｍ・幅２０ｃmのぐり石があり、「山神」と彫られてある。碑の背後には小さな祠がある。この山の神は３戸でお祭りしている。

三つ目は、木平橋の左岸側の丸山のヒノキ林を１００m程入ったところにある。高さ４０ｃｍ・幅２５の大きさで「山神」と彫ってある。お祭りする人がいなくなり、碑は倒れていた。

○鍵引き

ウツギの枝は、家族の男性の数と神さんの分を束ねる。供え物は、重ねモチ、クリ、タツクリ、干し柿を一升枡に入れ、フシの木を面とりし「奉納　百姓道具一式」と書いたものも供える。７日午前６時頃、みんな揃ったところで鍵を引く。「世界、万国の宝、この山に引き寄せよ」と唱えて引く。

○その他

山の神は、山を仕切る神さんで、７日は「一切、山へ入るな」と代々伝えられている。

１つ目の山の神碑

２つ目の山の神碑

３つ目の山の神碑

山の神調査票７９

日時・平成１４年２月６日（水）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝長瀬の神矢組

話者＝浜中孝一さん（７７歳）

○山の神碑

名張川に架かる長瀬橋を渡った集落の上のヒノキ林にある。山越えをし、青山町の高尾へ抜ける道を谷沿いに進むと、大きな岩があり、山の神は岩の根元にある。高さ８７ｃｍの家形で、真ん中をくりぬいて、その中に高さ２５ｃｍ・幅１３ｃｍの山神と彫り込んだ碑が置かれてある。碑の側面に宝暦三天（１７５３年）と読める文字が彫り込んである。２５０年も林の中に鎮座していた。

○鍵引き

同地区は１５戸あるが、平成１４年に鍵引きした人は５戸。ウツギの枝は一家で７本を束ねる。１月７日の朝、鍵引きをする。一升枡にモチを７つ入れて供え、鍵引きをした後、ワラを燃やして、モチを焼く。モチは七草粥に入れて食べる。鍵引き歌は、とくに唄わない。

○その他

山の神調査票８０

日時・平成１４年２月６日（水）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝長瀬の大上

話者＝大森勇さん（７５歳）

○山の神碑

長瀬橋から２００ｍ程登った山腹に大森さんら３戸が祭る山の神碑がある。大森さんの背後の山林の中で、ケヤキの大木が２本そびえる間に碑はある。高さ３５ｃｍ・幅２８ｃｍの大きさで、将棋のコマのような形の石に「山神」と彫られてある。碑は、苔むして、山の神にふさわしい雰囲気をかもしだしている。

○鍵引き

今では大森さん１軒のみが参っている。ウツギは７本束ねる。１月７日午前６時頃、モチ７個と、干し柿、タツクリなど供え、鍵引きをする。歌はとくに唄わない。

○その他

山の神調査票８１

日時・平成１４年２月６日（水）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝長瀬の米山

話者＝米山伝雄さん（７５歳）

○山の神碑

名張川左岸側の集落の山の中に米山伝雄さんら３戸が祭る山の神がある。碑ではなく８０ｃｍ程の自然石で、カシの大木の根元にある。米山さんの祖父が、すでにあった山の神講とは別に自然石を山の神にしたという。

○鍵引き

ウツギの枝は７本を束ね、石を７個入れた福俵をつける。鍵引きは１月７日の夜明け前にするが、鍵引き歌は、教えてもらってないという。

○その他

山の神調査票８２

日時・平成１４年３月１２日（月）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝長瀬の上出

話者＝勝山巳三男さん（７０歳）

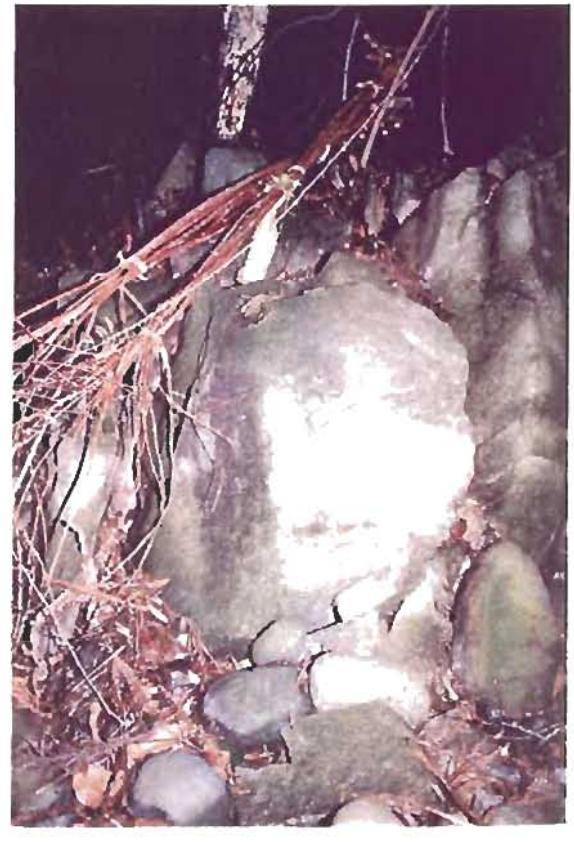
○山の神碑

名張川左岸の集落の上の山にある。市道蔵持町霧生線から約５０ｍ山の中に入った急斜面に９０ｃｍ程の大きさの自然石がそれである。風雨にさらされて表面が削れ、わずかに「神」の文字が読み取れる。

○鍵引き

１月７日の午前６時頃、鍵引きをする。ウツギは７本束ねる。一升枡にモチ、ミカン、干し柿を入れて供える。最近は鍵引き歌は唄わなくなった。

○その他



山の神調査票８３

日時・平成１４年3月１２日（月）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝長瀬の上谷

話者＝上谷さわのさん（７５歳）

○山の神碑

市道蔵持町霧生線沿いにある集落のはずれの山中に上谷さんら、上谷姓の三戸が祭る山の神さんがある。ヒノキ林の急斜面に高さ７０ｃｍ程の祠があり、その中に上谷さんたちが崇める山の神さんが鎮座。３０ｃｍの自然石、１５ｃｍ程の熔岩、それに４０ｃｍ程の「富士浅間」と彫られた石碑がある。傍らのカシの大木に３束のウツギが引っ掛けてあった。

○鍵引き

1月7日午前6時頃、鍵引きをする。ウツギは7本を束ね、小判型のモチ7つと、干し柿、クリ、それに酒を供える。モチはワラを焼いてあぶり、持ち帰って七草粥に入れる。上谷さんは鍵引きをしないが、毎月1回お参りするという。

○その他

山の神調査票８４

日時・平成１４年3月1 1日（月）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝長瀬の糀屋・中出

話者＝大矢善光さん（６２歳）

○山の神碑

糀屋前のバス亭上の集落、糀屋、中出組１５戸が祭る山の神の祠が集落の上の山中にある。急斜面に赤い鳥居があり、すぐに分かる。平成9年に造営、ペンキを塗り替えた。祠は９０ｃｍ程の大きさで、中には高さ４０ｃｍ・幅２０ｃｍの黒っぽい石の碑があり「山の神」と彫ってある。傍らに祠の棟札8枚があった。古いものでは嘉永2年（１８４９）のものがあった。

○鍵引き

平成１４年は１４戸が鍵引きをした。ウツギは7本束ねる。小判形にしたモチ7つを供える。鍵引き歌は唄わなくなったという。

○その他

「東の国の銭金、西の国の糸綿、うちの蔵に引き寄せよ」と唄って3回引く。

山の神調査票８５

日時・平成１４年３月１１日（月）・聞取者＝松崎一三、杉山岩男

地域＝長瀬神矢組の永岡

話者＝永岡伸之さん（６９歳）

○山の神碑

長瀬橋から右岸側を１００m程下った山中に永岡さんら神矢組の６戸がお祭りする山の神がある。２０m程登ったヒノキ林の中で、石を積んだ基壇の上に高さ３７ｃｍ・幅２８ｃｍの「山神」と彫った碑がある。

○鍵引き

平成１４年は、組に不幸があったため、永岡さんら２戸が鍵引きした。ウツギは男女を問わず、家族の数だけ束ねる。しかし、鍵引きは男性だけがする。モチ、ミカン、干し柿などを一升枡に入れて供え、持ち帰って七草粥に入れる。「大和の国の味噌醤油、伊勢の国の米魚を引き寄せよ」と唄いながら、３回引く。

○その他